

イボクラゲ



△ 紀南地方で珍しい大型のイボクラゲ (白浜町で)

久保田 信

10



田辺湾に出現する大形の鉢クラゲは2種知られるが、本連載第⑨で紹介したエビクラゲよりもさらに大形なのがイボクラゲである。

イボクラゲは傘の直径が50センチに達する。傘は青色か青紫色で、頂端に顕著なイボ状の突起が多数密集した塊となっている。これが和名の由来だが、その機能は不明である。また、イボクラゲは外洋性で熱帯性起源だと推察されるが、南西諸島で遭遇したこともないし、田辺湾周辺海域で遭遇する機会もめったになく、どこでどのように発生しているかは謎である。

田辺湾とその周辺での記録は、1993年以降はわずか12個体である。93年12月5日に、白浜町阪田で初めて1個体が浮遊しているのを網で捕獲した。傘径が45センチもあり最大に近かった。その3日後に1個体を当時、京大瀬戸臨海実験所職員だった田名瀬英明さんが発見。翌94年12月にも1個体が浮遊しているのを見つけた。また、田名瀬さん

(京都大学准教授)

ら、94年11月と2002年10月にも2個体ずつ発見したと聞いた。05年9月には北浜に1個体漂着した。

07年11月には近畿大学白浜種苗センター職員が職場近くで、09年11月にも同センター職員が捕獲した。田辺湾産のプラシトンをまとめられた故山路勇先生による1958年出版の論文でも、本種が大変まれだと記されている。田辺湾以外では、みなべ町界の刺し網に01年2月と03年12月にかかっていたのを田名瀬さんが見つけた。

生活史は、故杉浦靖夫先生が解明している。神奈川県で採集した雌からプラナリア幼生を取り出し、実験室で飼育したところ、他の鉢クラゲと違い、1度にたった1個体のエフィラ(小さなクラゲ)しかつくりないのでクロンヅメリの効率は悪い。